



再生 戦後の大須

抜けば玉散る氷の刃……………47

大須に野球場があった！……………49

狐の嫁入り・河馬の嫁入り……………53

七ツ寺共同スタジオ……………55

大須大道町人祭……………58

スーパー一座のロック歌舞伎……………59

天ぷらとトンカツ……………61

明治から戦前へ 大須の変遷

大須大火余聞……………32

大須から富士の山が見える……………35

春宵一刻值千金……………37

鶯の鳴く音を聞けば働けず……………39

盲目の義太夫語り……………41

落語界のシーラカンス……………42

浅間小路……………44

凡例

まえがき……………10

◆ 殷賑 大須門前……………12

江戸時代 門前の賑わい

数珠かけ鳩……………12

七寺太子堂……………14

文左衛門 大須日記……………16

清壽院芝居繁盛記……………18

ラクダの御利益……………20

犬に生まれ変わらば、師に仕える……………22

掛取り撃退法……………24

開帳で大須は賑わう……………26

万年寺の石碑……………28



大須観音境内骨董市



富士浅間神社



紙張地藏尊



金波楼の芸妓・金吾姐さん



新天地通り



万松寺通り



仁王門通り



金沢町(昭和初期)

◆ 清雅風韻 上前津界限

隠れ里……………101

脱藩して俳人となる……………103

前津の料亭……………105

大根に敗けてたまるか！……………107

鳥屋横町……………109

願いこめた三宝殿の鶏……………110

熊胆丸小路……………84

陰徳、陽報をもたらす……………86

信長小路……………88

赤穂義士大須で人気高まる……………90

矢場地蔵……………92

赤門通り……………93

万松寺対大須観音……………95

裸の忠臣蔵……………97

新天地……………99

◆ 青楼残影 西大須

紫川……………63

観音堂裏の花街……………64

猫飛び横町……………66

茶碗を割って病院を出る……………68

さりとはつらいね……………70

籠の鳥、御園座へ！……………73

たわけの標本……………75

公孫樹の木が戦火を防いだ！……………76

平民食堂……………78

◆ 新天地 赤門・万松寺界限

世間名利ふたつながら虚無……………81

◆ 青楼残影 西大須……………63

名古屋大須ものがたり

## はつめい

堀川文化探索隊は、平成十二年十二月に発足した。毎月一回、市内各所を探索して歩き、今年、平成二十二年十二月には百回目の例会を迎える。

今年はまだ、名古屋開府四百年の節目の年にあたる。堀川文化探索隊発足十周年記念と名古屋開府四百年を祝い、記念刊行したのが本書『名古屋大須ものがたり』である。

大須に材を取り本書を刊行したのは、大須が市民の生活と密着した庶民の町であるからだ。大須は人々に慰藉と娯楽を与えてくれる。大須の町を散策することにより、疲れはてた身体は自然と癒されてゆく。大須は江戸の昔から現代にいたるまで、庶民を温かくつつみ込み、慰めてくれる町だ。

大須の町は真福寺の山門を中心として発展してきた町だ。大須の観音さまと親しまれている真福寺は、岐阜県羽島市の大須より、慶長十七年（一六一二）徳川家康の命により移転してきた寺である。大須には同じく羽島から移転してきた北野天満宮がある。大須の地名は、岐阜の羽島市より移転してきた真福寺とのゆかりによって付けられた名前だ。大須の地に古くからある富士浅間神社は、明応四年（一四九五）、駿河の浅間神社から勧請した神社である。浅間神社の境内地に修験者の道場、清壽院があった。明治の廃仏毀釈により、浅間神社は残り、清壽院は取り毀されてしまった。真福寺の東側には七寺がある。真福寺、清壽院、七寺の山門には芝居小屋が掛けられ、見世物、寄席、歌舞伎等が演じられていた。小屋の周囲には茶屋ができ、芝居見物の客でいつも繁盛していた。

町には表の顔もあれば、裏の顔もある。はなやかな大須の繁栄の影で春をひさぐ女たちがいた。それらの女を大須観音の裏側の地に集め、公認の遊郭旭廓が明治六年にできた。不夜城の旭廓は、いつもぞめき客で賑わっていた。

旭廓は大正十二年には、中村へ移ってゆく。

江戸時代、万松寺・赤門一帯は、一面の野原で、狐が出没して、人々に悪戯をするような物淋しい地であった。この一帯は、大正初めの万松寺境内の開発により、商店街として賑わうようになった。昭和八年、大須の町を東西に横断する赤門通りの開通と、昭和九年、門前町を縦断する本町通りが岩井町まで改修されたことにより、さらに万松寺一帯は賑わうようになった。

万松寺・赤門一帯には多くの映画館や芝居小屋が開館した。家具店や古着の洋服を吊す店が軒を並べていた。万松寺・赤門一帯は、いつも人波の絶えない町へと変貌してきた。

現在も大須は多くの老若男女を迎え、賑わっている。最近では外国人の姿も多く見かけるようになった。『名古屋大須ものがたり』は大須の変遷をエピソードを中心として綴ったものだ。ひとりでも多くの人々に、本書を手がかりにして大須の町を散策して頂きたい。そして大須が、いつまでも名古屋の繁栄の中心の町であることを祈っている。

堀川文化探索隊の伊藤正博・瀧山時子・谷川隆子・寺西功一・深谷三代子の諸氏には、本書刊行にあたり入力、写真の蒐集、校正に多大の尽力を頂いた。そして、お世話になったあるむの川角信夫氏にも、深甚の感謝を致している。また貴重な資料・写真を提供して頂いた方々には、この場をお借りして心から感謝を申し上げます。

堀川文化探索隊代表 沢井 鈴一

殷賑

大須門前

●江戸時代 門前の賑わい

数珠かけ鳩

高速道路を岐阜羽島で降り、「大須」に向かって車を走らせる。大須の部落の直ぐ西側には、高い堤防が連なっている。堤防に上れば長良川が悠久に、とうとうと流れている。人の世の営みのはかなさを教えてくれるかのように、水の流れは留まることなく流れていく。狭い大須の部落は、長良川の堤防の下に、寄り添うようにして出来ている。

狭い部落の中に、商売をやめた店が扉を閉ざしたまま、何軒か並んでいる。この辺りが岐阜羽島駅と大須とを結ぶ竹鼻線の終着駅、大須駅があったところである。廃駅の跡地には、雑草だけが生い茂っている。この部落の一面に、大須観音が建っている。名古屋の大須観音のミニチュア版のようだが、じつはこちらが本家本元だ。

名古屋の大須真福寺は、この岐阜羽島の大須から移されたものだ。羽島の大須は長良川と木曾川に囲まれ、いくたびか洪水に見舞われた。慶長十七年（一六一二）徳川家康の命により、名古屋の現在地に移ってきた。移転した最大の理由は、真福寺の所蔵する開山の能信上人以来の歴代住職が蒐集した貴重本を、水害のために流失させたり、散逸させたりするのを、家康が危惧したからである。真福寺の所蔵する蔵書は一万五千件、その中には国宝四件、重要文化財二十件が含まれている。

国宝『古事記』の真福寺本は、現存最古の写本であり、三帖よりなる。『翰林学士詩集』は、唐王朝二代皇帝太宗（李世民）の御製詩に、褚遂良・許敬宗などの近臣が応詔奉和した詩集の残巻である。『漢書食貨志第四』は、中国古代

の歴史書『漢書』に、唐時代の儒学者、顔師固（五八一〜六四五）が注釈を加えたもの。食貨は経済の意で、この本は中国古代最古の経済書である。『瑠玉集巻第十二・第十四』は、中国教養書の古写本である。

印刷技術の発達していない当時、書物の普及は写本に頼らざるを得ない。気の遠くなるような根気と執念によって、一字一字でいねいに、間違いのないように、しっかりと書かれていた写本が、真福寺本である。

羽島から名古屋に移され、水害から真福寺本は護られることになった。明治二十五年の火災で、本堂・五重塔などは焼失したが、真福寺本は類焼を免れることができた。昭和九年に竣工した鉄筋コンクリート造りの真福寺文庫（大須文庫）が出来上がり、昭和二十年三月十九日の空襲により、本堂や仁王門などが炎上した折も、文庫は無事であった。

心の拠りどころである寺が自分の住む村から消えていく。しかし家康の命に逆らうことのできる者はいない。村人にとって、『古事記』の写本などは、自分たちの生活とは無縁のものだ。観音様は、自分たちの暮らし向きを、毎日見つけて頂いているありがたい仏様だ。村人たちは観音様が去つていかれるのを嘆き、途方に暮れていた。

家康の命を伝える家老成瀬正成と、村人との板ばさみになった大須観音二十二世住職悲遍は、慶長十七年十月十二日に亡くなってしまふ。村人の間では、観音様のたたりである、怨念の報いであるとか、さまざまな風評が飛び交った。いづれにしろ心労による死であることは疑いない。

大野一英『大須物語』に、移転に伴う伝説「数珠かけ鳩」の話が載っている。数珠かけ鳩とは、首のところにサシ毛が丸く生えていて、数珠をかけているように見える真っ白な鳩のことだ。

名古屋の大須に、鳩たちも寺とともに移つていった。ところが故郷の羽島の須が、恋しくてたまらない。鳩は疲れをもとせず、名古屋の上空を飛び、木曾川を越え、羽島の地に飛んできた。岐阜の羽島では、首にサシ毛が生え、真っ白な鳩を、名古屋の観音様のお使いの鳩として丁重にもてなした。

観音様にまつわる伝説も残っている。観音様が村人の手によって、船積み



羽島市大須にある真福寺

終え、いよいよ出発の刻がきた。村人は手を合わせて称名を唱える。南無観世音菩薩の声が川面に響いていく。ところが長良川の岸を離れると、船は逆風を受けて進まなくなる。観音様も大須を離れるのを嫌がつておいでになったのだ。そこで名古屋に移つてからも、観音様の住まわれる地を大須という名にすると、川は鎮まり、船は動き出したということだ。

大須観音は通称で、正式には北野山真福寺宝生院という。真言宗智山派に属し、京都の智積院の末寺である。しかし本山からは特別の寺格を与えられて、準号別格本山として、独立した活動を許されている。

真福寺の開創は元弘三年（一三三三）のことだ。後醍醐天皇の勅願により尾張国中島郡〔羽島市〕に北野天満宮北野社が勧請された。同じ頃、北野社の神宮寺〔神社に付属して置かれた寺院〕として、能信上人が真福寺を創建した。南北朝時代には壮大な伽藍を誇り、律蔵坊・大智坊など八坊が、広大な敷地の中に配されていた。そのうちの宝生坊が、応安四年（一三七二）に宝生院として独立した寺院となる。さしもの宝生院も打ち続く戦乱と、水害にいくたびも見舞われ衰微していく。そして家康の命により、名古屋に移つてきたのである。

大須観音はいつも参拝者が絶えない。境内ではさまざまなイベントが催される。大正琴、縁日、大道芸、そして歌謡ショーから金粉ショーまでが行われる。観音様と金粉ショーの取り合わせは、妙なことだが、大須は違和感もなく受け容れる。大須観音は庶民の観音だ。取り澄ました特権階級のものではない。文字どおり、みんなの観音様だ。観音様の前で、喜び、笑い、そして生きて日々あることを感謝する。

今日も境内には幾羽もの鳩が舞っている。羽島に帰ることもなく、のんびりと餌をついばんでいる。

## 七寺太子堂

七寺ななつでらは真言宗に属し、長福寺と号する。江戸時代には八千二百十一坪を有する、広大な寺域と壮麗な伽藍を誇る大寺院であった。七寺の広大な敷地の中に太子堂があった。『金鱗九十九之塵』の中に、太子堂創立の次のような伝説が載